

英語の-en 接辞動詞化に関する意味的考察

又吉 貴大 日高 俊夫
神戸松蔭女子学院大学大学院 九州国際大学
t.matayoshi1013@gmail.com t-hidaka@cb.kiu.ac.jp

関西言語学会第 42 回大会
2017 年 6 月 10 日, 京都大学

1 はじめに

現代英語における動詞化接尾辞としては、-ize, -ify, -en 等が存在するが、-ize や -ify は、その生産性の高さゆえに語彙意味論の立場から比較的研究対象とされてきた (Lieber 1998, Plag 1999, 影山 2007)。一方、-en は生産性が低い (Lieber 2004, Bauer 1983) とされているためか、形態統語的・音韻的条件からの考察 (山根 1983, Katamba 1993) はあるものの、意味的観点からの分析は、Levin and Rappaport Hovav (1995) や松崎 (2011) が挙げられる程度で、管見の限り、半ば等閑視されてきたように思える。また、-en 接尾辞による形容詞由来動詞は、いわゆる Telicity の面では Degree Achievement Verb (DAV; Dowty (1979)) のひとつとして、その他の形容詞由来動詞と区別なく議論されてきた (Hay, Kennedy, & Levin 1999, Kearns 2007)。

以上のような状況を踏まえて、本発表では、次のことを示す。

- (1) a. **基体形容詞に対する意味的条件:** 「基体形容詞が段階的意味を表すものでなければならない」という制約が、-en 派生において実際に機能している。
- b. **意味的透明性:** それに対して、音韻条件は満たすものの、明示的な接辞を伴わない、いわゆる形容詞転換動詞は、意味が特化しているものが多く、基体形容詞との意味的な関連性が不透明であったり、もともとの形容詞がスケールを持たないものであったりする。-en による動詞は、基体動詞との意味的関連性が、形容詞転換動詞よりも透明である。
- c. **telicity の問題:** -en 動詞は、DAV の中でも、cool 等の形容詞転換動詞と、telicity の解釈において違いがある。先行研究では -en 動詞とその他の Degree Achievement Verb を同列に扱っているが、-en 動詞には、それに特化した意味的特性があるので、完全に同列に扱うべきではない。

2 基体形容詞の形態音韻構造および意味に関する先行研究

2.1 形態統語的制約

山根 (1983) によれば、-en 派生を受ける基体は名詞、あるいは形容詞でなければならない。

- (2) a. N -en 型 strengthen, lengthen, threaten など
- b. Adj -en 型 darken, widen, deepen など

N-en 型の派生は、現代英語においてほとんど生産性の無いものとして指摘されている。従って、本発表においては低いながらも生産性を持つ形容詞由来の -en 動詞のみを議論の対象とする。

2.2 音韻的制約

Katamba (1993) によれば、-en 動詞化を受ける基体の音韻構造は (3) に示す条件を満たすものでなければならない。

- (3) a. The base must be monosyllabic.

- b. ...the base must end in an obstruent (i.e. stop, fricative or affricate), which may be optionally preceded by a sonorant (e.g. a nasal consonant or an approximant like /l/ or /r/)...

(3) に従えば、-en 動詞化を受ける基体の語末音韻構造は (4) の 2 通りに限定される。

- (4) a. –Vowel—Consonant(obstruent)
b. –Vowel—Consonant(sonorant)—Consonant(obstruent)

-en 動詞は概ねこの規則に適った語末音韻構造を持つ。(5) の派生はこれらの規則によって説明可能である。(6) は (5) の基体形容詞の語末音韻構造である)

- (5) a. deep[di:p]–deepen[di:pən]
b. strength[streŋθ](米英語)¹–strengthen[streŋθən]
c. green[grin]–*greenen[grinən]
d. dangerous[deɪŋərəs]–*dangerousen[deɪŋərəsən]

- (6) a. –Vowel–Consonant(obstruent)
b. –Vowel–Consonant(sonorant)–Consonant(obstruent)
c. –*Vowel–Consonant(sonorant) (not end in an obstruent)
d. –*Vowel ... Vowel–obstruent (not be monosyllabic)

しかしながら、(7) のような例外も少数であるが見られる。²

- (7) a. crisp[krɪsp]–crispen[krɪspən]
b. moist[mɔɪst]–moisten[mɔɪsən]³
c. fast[fæst]–fasten[fæsən]
d. quiet[kwaɪət]–quietten[kwaɪətən]

- (8) a. –Vowel–Consonant(obstruent)–Consonant(obstruent)
b. –Vowel–Consonant(obstruent)–Consonant(obstruent)
c. –Vowel–Consonant(obstruent)–Consonant(obstruent)
d. –Vowel–Vowel–Consonant(obstruent)

¹本発表におけるデータにおいて、形容詞由来の-en 動詞ではこの語末音韻構造を取るものは存在しなかった。

²本発表の主張に焦点を当てる為に、音韻的制約の例外に関する詳細な議論は行わない。

³moists, fast は派生の際に最語末の子音が脱落し、音韻的制約に適った語末音韻構造となる。しかしながら、音韻的制約は派生前の語末音韻構造に制限を与えるものであり、例外と見なすべきだと考えられる。

2.3 意味的制約

Levin and Rappaport Hovav (1995) は、基本的に脱形容詞化動詞は場面レベルの意味の形容詞から派生し、個体レベルの意味の形容詞からは派生しないとしている。個体レベル/場面レベルは (9) のように区別される。

- (9) a. 個体レベル：時間的・空間的に限定を受けない個体の永続的性質を示す。
- b. 場面レベル：時間的・空間的な限定を受ける一時的性質を示す。

場面レベルな形容詞は時間・空間限定副詞句と共起可能であるのに対して、個体レベルな形容詞は時間・空間限定副詞句と共起できない。

- (10) a. *He was tall yesterday.
- b. *He was tall at that party.
- c. He was drunk yesterday.
- d. He was drunk at that party.

-en 動詞化と場面/個体レベル叙述との関連について、Levin and Rappaport Hovav (1995) によれば脱形容詞化動詞である -en 動詞は場面レベルの意味を持つ形容詞からのみ派生する。Levin & Rappaport は形容詞 smart が -en 派生を受け動詞 smarten へと派生する際に、「頭が良い(個体レベルな意味)」は smarten に引き継がれず、「恰好のいい(場面レベル)」から派生したと考えられる「おしゃれをする」という意味のみが派生すると述べている。

2.4 Blocking、及び形容詞概念の動詞化の意義による制約

松崎 (2011) は音韻、形態統語的制約に適いながらも -en 動詞化を受けない形容詞は、形容詞概念に対応する動詞が既に存在することにより派生が阻害されるためであると述べている。例えば、松崎 (2011) は (11) が派生しないのは (12) が英語において既に存在することが理由であると述べている。

- (11) a. hot[hɒt] – *hotten[hɒtən]
 - b. safe[seɪf] – *safen[seɪfən]
 - c. cold[kəʊld] – *colden[kəʊldən]
- (12) a. hot – heat
 - b. safe – save
 - c. cold - chill

また、(13) の例は、対応する動詞が存在しないものの -en 動詞化を受けない形容詞であり、これらが -en 動詞化を受けないのは、実際の言語運用において形容詞概念の動詞化に意義が無い為であるとしている。

- (13) a. big[bɪg] – *biggen[bɪgən]
- b. rude[ru:d] – *ruden[ru:dən]
- c. loud[laʊd] – *louden[laʊdən]

2.5 本発表における先行研究の位置づけ

本発表においては、形態統語的制約(山根 1983)により、形容詞由来の-en 動詞のみを対象とし、また、音韻的制約(Katamba 1993)、意味的制約(Levin & Rappaport Hovav 1995)は-en 派生に制約を与えるものとして議論を進める。なお、Blocking 及び、形容詞概念の動詞化の意義による制約(松崎 2011)は、形容詞対応する動詞の恣意的な関連付けを可能な限り避けるために、形容詞転換動詞による Blocking のみ制約を与えるものとする。

従って、以下の制約は機能するものとして具体的調査を行う。

- (14) a. 基体形容詞は単音節かつ、最語末に阻害性の子音が、その前に任意の共鳴性の子音が生じるという語末音韻構造を取らなければならない。
- b. 基体形容詞は場面レベルの意味を持つものでなければならない。
- c. 基体形容詞の転換動詞が存在してはならない。

3 基体形容詞の段階性と-en 動詞化の関連

3.1 具体的調査

まず、本発表における1つ目の主張である(1a)を再掲する。

- (15) a. 「基体形容詞は段階的意味をもつものでなければならない」という制約が-en 動詞化において実際に機能している

この主張の検証の為に、(16)の検証を行う。

- (16) a. -en 動詞化を受ける形容詞は段階的意味を持つ。
- b. (14)に適いながらも-en 動詞化を受けない形容詞は段階的意味を持たない。

段階的な形容詞の性質

- (17) a. 程度副詞による修飾が可能である。
- b. 比較級変化が可能である。
- c. 否定した際に、その対義語の表す意味と同義とならない。

本発表では、(17a)を用いる。具体的には程度副詞 very による修飾を用いて検証を行う。例えば(18a,b)において、段階的意味を表す形容詞 bright は程度に言及可能であり、程度副詞 very による修飾が可能である。しかし、(18c,d)のように段階的意味を持たない形容詞 male は「どれだけオスであるか」という程度に言及できないため、程度副詞 very による修飾が不可能である。

- (18) a. This room is bright.
- b. This room is very bright.
- c. This cat is male.
- d. *This cat is very male.

これらを(19)の具体的調査を通じて検証した。

- (19) a. -en 動詞化を受ける形容詞を『ジーニアス英和辞典(第四版)』及び『ジーニアス英和大辞典』から、『ジーニアス英和辞典(第四版)』から先行研究における派生条件(14)の例外となる形容詞を抽出する。
- b. 抽出したデータを BNC (British National Corpus) における very X (X は任意の形容詞) での用例数により分類する。
- c. 便宜的に用例数 20 件以上のものを「段階性を持つ」ものと、用例数 0 件のものを「段階性を持たない」ものと見なし、用例数 1 件から 20 件のものは「段階性が保証されないもの」として個別に論じる。

3.2 -en 動詞化を受ける形容詞

-en 動詞化を受ける形容詞の段階性については、以下の結果が得られた。

- (20) 『ジーニアス英和辞典(第四版)』及び『ジーニアス英和大辞典』において、-en 派生を受ける形容詞 47 例の内、35 例(約 74%)が BNC において「段階性を持つ」、11(約 23%)例が「段階性が保証されない」、1 例(約 2%)が「段階性を持たない」振る舞いを示すことから、「-en 動詞化を受ける形容詞は段階性を持つ」ということが概ね言えそうである。

BNC における、very による修飾の具体的データを以下に示す。

- (21) 用例数が 21 件以上 : 35 語

black (35), broad (133), bright (160), cheap (110), dark (159), deep (134), fast (99), fat (31), flat (33), fresh (26), glad (156), hard (971), late (137), light (113), loose (29), neat (48), quiet (306), quick (172), red (57), rough (109), sad (282), sharp (94), short (611), sick (80), smart (100), soft (86), straight (45), steep (77), stiff (32), thick (76), tight (147), tough (99), weak (146), white (62), wide (361)

用例数が 1-20 件 : 11 語

coarse (14), crisp (7), dead (10), deaf (10), like (5), mad (3), moist (5), ripe (8), slack (4), taut (1), worse (2)

用例数なし : 1 件

less

しかし、(21bc)のように「段階性が存在しない」「段階性が保証されない」との結果となった例も存在している。本論の主張における反例となるこれらに対する説明のために、(22)のように分類を行う。

- (22) a. 形容詞の比較級変化形

worse (2), less (0)

- b. 派生の際に段階的な意味が引き継がれる例

dead (10)

- c. 意味から段階的であると考えられる例

deaf (10), crispen (7), coarse (14), slack (4)

- d. スケール上の一区間を意味していると考えられる例

mad (3), moist (5), ripe (8), taut (1)

以下ではそれらに対する個別の説明を行う。

形容詞の比較級変化形 worse (2), less (0)

(17ab) より、段階的である形容詞は比較級変化が可能である。従って、(23) に示すように、形容詞の比較級変化形であるこれらの例は、段階性を持つ例であると見なすことが可能であると考えられる。

- (23) a. little – less
b. bad/ill – worse

派生の際に段階的な意味が引き継がれる例 dead (10)

インフォーマントによれば、dead から派生する-en 動詞である *deafen* は「死ぬ・殺す」といった意味は持たず、「(音や光を)弱くする」といった意味のみを持つ。このことから、非段階的の意味である「死んでいる」は-en 動詞に受け継がれず、段階的であると考えられる「(音や光を)弱が弱い」という意味のみが受け継がれており、この例は本論の主張を支持する例であると考えられる。

意味から段階的であると考えられる例 deaf (10), coarse (14), crisp (7), slack (4)

deaf は「耳が聞こえない」という意味において、段階性を持たないものであるように見えるが、「耳がよく聞こえない (難聴である)」ことも意味する。インフォーマントによれば、*deaf* は *partially* 「部分的に」と共起可能であり、(24) は共に可能な例である。

- (24) a. He was deafened by the accident.
b. He was partially deafened by the accident.

従って、*deafen* は「耳がどの程度聞こえないか」という段階性をその意味の中に持つものであると考えられる。*slack* 「(糸が)たわんでいる」、*coarse* 「(生地など)が粗い」、*crisp* 「(触感が)パリパリしている」も同様に、「(糸が)どの程度たわんでいるか」「(生地などが)どの程度粗いか」「(触感が)どの程度パリパリしているか」というスケールを設定することが可能であると考えられる。

スケール上の一区間を意味すると考えられる例 mad (3), moist (5), ripe (8), taut (1)

これらの形容詞は、意味の内に既に「どの程度～か」という意味が含まれているため、*very* による修飾を受けにくいものであると考えられる。*Oxford Advanced Learner's Dictionary* における記述を以下に示す。

- (25) a. ripe: (of fruit or crops) **fully** grown and ready to be eaten.
b. mad: **very** angry
c. moist: **slightly** wet
d. taut: stretched **tightly**

(25) において *ripe* には *fully* 「十分に」という意味が既に含まれており、「植物の成長度合い」というスケールは持つものの「十分に成長しきった」という一区間のみを意味するものであると考えられる。*mad*, *moist*, *taut* もそれぞれ同様に、*very*, *slightly*, *tightly* といった程度を表す意味が語の意味の中に含まれている。更に、BNC においては少数ながらこれらの語の比較級変化形が見られ、段階的な形容詞としての振る舞いを示していると考えられる。

- (26) a. mad – madder (34)

- b. moist – moister (6)
- c. ripe – riper (7)
- d. taut – tauter (3)

不透明な派生となるもの liken

基体形容詞 like とその-en 動詞 liken は意味的な関連性が不透明である。(27) に基体形容詞 like と-en 動詞 liken の意味を示す。

(27) a. like: 似ている

b. liken: 例える / なぞらえる

派生が透明であれば、-en 動詞 liken は「似せる / 似ている」という意味が生じると推測されるが、実際には派生が不透明であり「例える / なぞらえる」といった意味が生じている。この例は、段階性という観点からは説明のつかない例外である。

3.3 先行研究における派生条件 (14) に適いながらも-en 動詞化を受けない形容詞

先行研究における派生条件 (14) に適いながらも-en 動詞化を受けない形容詞の段階性に関しては、以下の結果が得られた

(28) 『ジーニアス英和辞典 (第四版)』において、(14) に適いながらも-en 動詞化しない形容詞 33 例中、BNC において 28 例 (約 85%) が「段階性を持たない」、4 例 (約 12%) が「段階性が保証されない」、1 例 (約 3%) が「段階性を持つ」振る舞いを示すことから、「-en 派生を受けない形容詞は段階性を持たない」と概ね言えそうである。

BNC における、very による修飾の具体的データは以下の通りである。

(29) a. 用例数が 21 件以上 : 1 語
top (124)

b. 用例数が 1-20 件 : 4 語
loath (6), scant (6), scarce (18), snug (5)

c. 用例数なし : 28 語
base, bland, blithe, brash, dank, dreich, eight, eighth, fifth, five, flip, fond, fourth, frank, lank, lush, nonce, nude, pat, rad, rank, rash, rife, shot, skint, snide, sparse, suave, wroth

本論の主張の反例となるものは (29ab) 例である。(30) にそれらを示す。

(30) top (順位が一番上である), loath (～するのに気が進まない), scant (～が足りない), scarce (～が不足している), snug (暖かく心地の良い),

これらの内でも説明が可能であるのは形容詞 top のみである。(31) に示すように、BNC において、top と共起するのは、主に「まさに～」という意味においての very であり、また、『ジーニアス英和辞典 (第 4 版)』において比較級変化は不可能であることから、段階性を持たない形容詞としての振る舞いを見せると考えられる。

(31) a. ...Oxford is seen as one of the **very top** universities in the world ...

- b. ... Winston Churchill and those in the **very top** echelons of the services, knew exactly when and where it would take place ...
- c. ... the elevator would go to the **very top** floor where it opened directly into McIlvanney's apartment.
...

しかしながら top 以外の語には「とても～」という意味での用例が存在する。

- (32) a. Newman Hall was **very loath** to talk about his £ 500 ...
- b. They offer **very scant** opportunity for children to express themselves ...
- c. This only illustrates how **very scarce** male dancers were at the time.
- d. ... the pram was **very snug** and comfortable ...

従って、例外となるものは (33) に示すものであると考えられる。

- (33) loath (～するのに気が進まない), scant (～が足りない), scarce (～が不足している), snug (暖かく心地の良い), sparse (人が少ない)

3.4 前半のまとめ

前半では以下の点について主張、検討を行った。

- (34) 「-en 派生を受ける基体形容詞は段階的な意味を表すものでなければならない」という制約が実際に機能している。

結果として (34) の妥当性は概ね検証できたと考えられる。しかしながら、(35) はその例外となる。

- (35) a. -en 動詞化を受ける形容詞 : like
- b. 音韻的、意味的派生条件に適いながらも -en 動詞化を受けない形容詞 : loath : ～するのに気が進まない, scant : ～が足りない, scarce : ～が不足している, snug : 暖かく心地の良い

(35a) に関しては、(36) に示す例外は存在するものの、その妥当性は概ね検証できたと考えられる。

- (36) a. -en 動詞化を受ける形容詞 : like
- b. 音韻的、意味的派生条件に適いながらも -en 動詞化を受けない形容詞 : loath : ～するのに気が進まない, scant : ～が足りない, scarce : ～が不足している, snug : 暖かく心地の良い, sparse : 人が少ない

4 -en 動詞の意味と Telicity についての問題点および主張

意味的に段階性を持つとされる形容詞から派生した widen や cool 等といった DAV は、アスペクトの面で曖昧性を示すことから、それを最初に指摘した Dowty (1979) 以来、多くの研究の対象になってきた (Abusch 1986, Hay et al. 1999, Kearns 2007, Kennedy & Levin 2008, Beavers 2013)。

また、英語において、形容詞から動詞を作る接尾辞は、-en の他に -ize, -ify があるが、-ize, -ify は、realize, falsify のように、必ずしも段階的変化を表す意味派生を示さず、また、categorize, computerize のように、名詞に付加する場合も多く、この場合もやはり段階的変化を表す訳ではない。さらに、後に示すように、形容詞転換動詞は、基体形容詞との意味的關係が不透明なものも多い。

以上のことを考え合わせると、段階的意味を持つ基体形容詞に付加する性質を持つ-en 動詞こそが、英語における DAV の中核を成していると考えられる。そこで、本発表では、分析対象を-en 動詞に絞り、比較対象として形容詞転換動詞を取り上げて議論する。

Levin and Rappaport Hovav (1995) や影山 (1996) によれば、-en 動詞および形容詞転換動詞は他動詞が基本であり、自動詞は他動詞から派生したものである。そして、意味的・認知的条件が整えば（対象の性質が自ら変化を引き起こすという「反使役化」が可能である場合）、その中の一部が自動詞として働く（影山 1996）とすれば、-en 動詞をある程度包括的に論じる場合、自動詞のみを分析対象とするだけでは十分でない。したがって、以下では-en 他動詞を主に分析し、そのアスペクト特性とを明らかにすることを目的とする。また、語形成過程の形式化にも触れる。

Kearns (2007)

自動詞の形容詞由来動詞のテリシティを詳細に分析 ((37)–(39) のデータは Kearns (2007) より)

- (37) a. telic: become -er (achievement; single transition)
形容詞由来で状態変化を表す全ての動詞の解釈がこの意味を含意する。
- b. atelic: become -er (achievement; process of iterated ‘become -er’ achievements)
(先行研究では atelic は process, telic は accomplishment として分析)
- c. telic: become A (accomplishment; durative event which is terminated by the onset of a uniquely specified endstate)
- (38) a. widen, increase: in ten minutes 等の場合, event delay reading のみ (telic) で comparative end state を表す (achievement としての性質)
- b. The pressure increased for a few minutes.
‘(Having increased), the pressure was greater for a few minutes.’
the gap widened for a few minutes.
‘(Having widened), the gap was wider for a few minutes.’
(結果状態継続の読み Pustejovsky (1995: 74) ができるので, The gap widened は telic としても解釈可能)
- (39) quieten, cool, clear: widen, increase と違い, 基体形容詞が upper bound を持つので, totality の implicature がある。comparative でも standard end state (x is A) でもよい。

本発表の主張

- (40) **Telicity について**
- a. 接尾辞-en は, スケール (Beavers (2013) の Complex Scale) 構造と関連する形容詞に付加し, そのスケール上の変化を表す (意味的に透明な派生)。その変化は瞬間的な変化として捉えられ, telic としての特性を持つ (Kearns 2007)。 (Hay et al. (1999) の「open scale を持つ形容詞に由来する動詞は atelic を表す」との主張に対する反例となる)。
- b. open scale を持つ基体形容詞に由来する-en 動詞は (37a) の意味となり, 基本的に telic。
→ BECOME A-er 解釈: CAUSE ([ACT ON (*x*, *y*)], [BECOME (*y*, A-er)])
ex. redden: If something reddens, it becomes or is made more red than it was.
(*Cambridge Advanced Learner’s Dictionary*, 3rd Edition)

- c. closed scale を持つ基体形容詞に由来する -en 動詞は (37a), もしくは (37c) に類似した意味で, Standard Onset Point (Kearns 2007) への変化を表し, やはり telic.
 → CAUSE ([ACT ON (x, y)], [BECOME ($y, A_{StOnsetP}$)])
 e.x. blacken: [I or T] to become black or to make something become black
 (Cambridge Advanced Learner's Dictionary, 3rd Edition)
- d. -en 動詞は, open scale の形容詞由来であっても基本的に telic の意味を表し, 「for ~」の場合は結果状態の継続時間あるいは離散的なイベントの累積としての継続時間 (Kearns 2007) を表す。それに対して, open scale の形容詞転換動詞や increase 等の変化動詞は, 連続的な process を表す。

(41) -en 動詞の意味について

-en 付加の音韻条件を満たす形容詞転換動詞は, 意味が特化しているものが多く, 基体形容詞との意味的な関連性が不透明であったり, もともとの形容詞がスケール構造と関係を持たないものも多い。一方, -en 動詞は, 基体動詞との意味的な関連性が, 形容詞転換動詞よりも透明である。

5 -en 動詞の表す意味: 形容詞転換動詞との比較

明示的な接辞を伴わず, かつ, 音韻条件を満たすものの -en がつかない例 (松崎 (2011) より): 意味が特化しているものが多く, 基体形容詞との意味的な関連性が不透明であったり, もともとの形容詞がスケールを持たないものであったりする⁴。

- (42) a. right: 直立する, 正しい位置に戻る
 b. round: 丸くなる (する), 四捨五入する, (角を) 曲がる
 c. brief: 要約する
 d. mute (元々形容詞は段階性なし): 音を弱くする, 感情を和らげる
 e. wild: 暴れる (米俗)
 f. wise: 教える, 気づかせる, 気づく
 g. wrong: 不当に取り扱う

形容詞転換動詞と en 動詞の両方が存在する場合, 前者の基体形容詞との意味的な関係は後者のそれよりも不透明である。

- (43) 杉岡 (2009) の英語の形容詞転換動詞のデータより, -en 動詞も並行的に存在するもの:
 loose/loosen, crisp/crispen, quiet/quieten, slack/slacken

-en 動詞が, 「基体形容詞の表す状態にする」というような比較的透明な意味派生をするのに対して, 転換動詞の意味は, 基体形容詞の意味をそのまま動詞の LCS に埋め込むというようなことでは派生しにくい。

- (44) a. **loose**: to speak or express emotions very freely, especially in an uncontrolled way (Cambridge Advanced Learner's Dictionary)
 *CAUSE ([ACT ON (x, y)], [BECOME ($y, LOOSE$)])

⁴wet は「濡れた状態にする」という意味で透明な派生と言えるが, 歴史的には動詞 weten の過去分詞 wett から形容詞が派生した逆形成である。

- b. **loosen**: [I or T] to (cause to) become loose (*Cambridge Advanced Learner's Dictionary*)
CAUSE ([ACT ON (x, y)], [BECOME ($y, LOOSE$)])
- (45) a. **crisp**: If food crisps or you crisp food, it becomes pleasantly hard, for example you have heated it at a high temperature. (*Collins Cobuild English Dictionary for Advanced learners*)
- b. **crisp**: vi, vt. to make or become crisp / to curl (*The Random House College Dictionary*)
- c. **crispen**: vi, vt. to make or become crisp (*The Random House College Dictionary*)
- (46) a. **quiet**: If someone or something quiets or if you quiet them, they become less noisy, less active, or silent.[mainly AM]
To quiet fears or complaints means to persuade people that there is no good reason for them. [mainly AM] (*Collins Cobuild English Dictionary for Advanced learners*)
- b. **quieten**: If you quieten someone or something, or if they quieten, you make them become less noisy, less active, or silent. [mainly BRIT] (*Collins Cobuild English Dictionary for Advanced Learners*)
- c. **quieten**: [I or T] UK (US quiet) to (cause to) become calmer or less noisy (*Cambridge Advanced Learner's Dictionary*)
- (47) a. **slack**: If someone is slacking, they are not working as hard as they should. (*Collins Cobuild English Dictionary for Advanced learners*)
- b. **slacken**: If something slackens or if you slacken it, it becomes slower, less active, or less intense. If your grip or a part of body slackens, it becomes looser or more relaxed. (*Collins Cobuild English Dictionary for Advanced Learners*)

6 Open Scale / Closed Scale

- (48) Hay et al. (1999) の closed scale 認定テスト (「completely テスト」)
- a. **closed scale**: straight, empty, dry ← completely straight/empty/dry
- b. **open scale**: long, wide, short ← ?completely long/wide/short

Kearns (2007): completely は definitely/unquestionably と解釈されうるので、それによる修飾が可能なことが、直ちに closed scale を持つということの証拠にはならない。

- (49) Kearns (2007) の closed scale 認定テスト (「could be テスト」)
- a. The soup is completely cool now, but it could be cooler.
- b. !The clothes are completely dry now, but they could be drier.
- c. !The room is completely quiet now, but it could be quieter.
- d. !The sky is completely dark now, but it could be darker. (Kearns 2007)

completely テストに通り, could be テストに通らない基体形容詞: closed scale

- (50) completely {black, dark, dead, deaf, flat, mad, moist, sharp, stiff, quiet, ripe, taut, tight}
- (51) a.*It is completely black, but could be blacker.

- b.*It is completely dark, but could be darker.
- c.*It is completely dead, but could be {deader / more dead}.
- d.*He is completely deaf but could be deafer.
- e.*He is completely mad, but could be madder.
- f.*It is completely moist, but could be moister.
- g.*It is completely sharp, but could be sharper.
- h.*It is completely stiff, but could be stiffer.
- i.*It is completely quiet, but could be quieter.
- j.*It is completely ripe, but could be riper.
- k.*It is completely taut, but could be tauter.
- l.*It is completely tight, but could be tighter.

(52) **completely** テストに通りつつも, could be テストにも通る基体形容詞: open scale
completely {?fat, fresh, ?hard, ?loose, ?neat, ?red, ?rough, white}

- (53) a. He is completely fat, but could be fatter.
b. It is completely fresh, but could be fresher.
c. It is completely hard, but could be harder
d. The dress is completely loose, but could be looser.
e. The room is completely neat, but could be neater.
f. The flag is completely red, but could be redder.
g. The surface is completely rough, but could be rougher.
h. The shirt is completely white, but could be whiter.

(54) **completely** テストに落ちる基体形容詞: open scale
completely {*broad, *bright, *cheap, *coarse, *deep, *fast, *glad, *less, *light, *quick, *sad, *short, *sick, *smart⁵, *soft, *steep, *thick, *tough, *weak, *wide, *worse}

(55) 結果

a. **open scale** 形容詞由来の-en 動詞 :

fatten, freshen, harden, loosen, neaten, redden, roughen, whiten
broaden, brighten, cheapen, coarsen, deepen, fasten, gladden, lessen, lighten, quicken, sadden, shorten,
sicken, smarten, soften, steepen, thicken, toughen, weaken, widen, worsen

b. **closed scale** 形容詞由来の-en 動詞 :

blacken, darken, deaden, deafen, flatten, madden, moisten, sharpen, stiffen, quieten, ripen, tauten,
tighten

⁵この場合、「(服装などが)スマートな」「身なりのきちんとした」のような意味

7 「become A」 解釈の可否

- (56) a. ?They widened the road, but it still was not wide. (Open Scale)
b. *The teacher quietened the students, but they still were not quiet. (Closed Scale)
c. *They darkened the room, but it still was not dark. (Closed Scale)
- (57) a. closed scale 形容詞由来の-en 動詞
→ Standard Onset Point (Kearns 2007) (X is A) への変化
blacken, darken, (deaden), deafen, flatten, madden, moisten, sharpen, stiffen, quieten, ripen, tauten, tighten
- b. open scale 形容詞由来の-en 動詞
→ 以前の状態と比較しての変化 (X is A-er)
fatten, freshen, harden, loosen, neaten, redden, roughen, whiten
broaden, brighten, cheapen, coarsen, deepen, fasten, gladden, lessen, lighten, quicken, sadden, shorten, sicken, smarten, soften, steepen, thicken, toughen, weaken, widen, worsen

8 Telicity

- (58) 自動詞
- a. **closed -en**: The room quietened for 3 minutes. (?duration, ??resultative state)
b. **open -en**: The gap widened for 3 minutes. (?duration, ??resultative state)
c. **closed conv.**: The shirt dried for 30 minutes. (duration / *resultative state)
d. **open conv.**: The soup cooled for 3 minutes. (duration / *resultative state)
- en 動詞は duration の解釈がややしにくい, 転換動詞は可**
- (59) 他動詞
- a. **closed -en**: The teacher quietened the students for 5 minutes. (*duration, ?resultative state)
b. **open -en**: They widened the road for 10 hours. (??duration < ?resultative state)
c. **closed conv.**: He dried the shirt for 3 minutes. (duration / *resultative state)
d. **open conv.**: He cooled the soup for 3 minutes. (duration / *resultative state)
- en 動詞は duration の解釈困難, 転換動詞は可**

(58), (59) → -en 動詞と転換動詞で, 同じ duration でも少し違いがありそう

- (60) a. *The soup cooled many times for 10 minutes.
b. *The shirt dried many times for 10 minutes.
c. The gap widened many times for 10 minutes.
d. The students quietened many times for about a minute.

- (61) a.*The soup cooled and cooled for 10 minutes.
 b.*The shirt dried and dried for 10 minutes.
 c. The gap widened and widened for 10 minutes.
 d.?The students quietened and quietened for about a minute.

(60), (61) → **-en 動詞は離散的变化, 転換動詞は連続的变化**

9 意味表示と意味合成

本発表では, Pustejovsky (1995) の特質構造を含む意味表示を修正した, Arai and Hidaka (2016) 等では使われている次のような動詞の意味表示を用いる⁶。

$$(62) \left[\begin{array}{l} \text{ARGSTR} = [\text{統語構造における項}] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{TS} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL: 時間的特性, 視点に関する情報} \\ \text{CONST: 語彙概念構造 (LCS)} \end{array} \right] \\ \text{NTS} = \left[\begin{array}{l} \text{TELIC: その動詞が持ち得る結果状態 (implicature 等)} \\ \text{TRIGGER: その動詞が成立するための外的要因} \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

形式役割 (FORMAL) 中の「時間的特性」については, Igarashi and Gunji (1998) および郡司 (2004) の記述方法を用いる。

(63) s : 行為開始時点 f : 行為完了時点兼状態開始時点 r : 状態終了時点

- a. 着る (状態変化動詞): $s < f < r < \infty$
 ($s < f$: activity $f < r$: 行為完了時点で状態変化 $r < \infty$: 行為前状態への復帰)
- b. 死ぬ (瞬間動詞): $s = f < r = \infty$
 ($s = f$: achievement $f < r$: 行為開始時点で状態変化 $r = \infty$: 行為前状態への復帰なし)
- c. 歩く (継続動詞): $s < f = r < \infty$
 ($f = r$: 状態変化なし, 行為完了時点がそのまま状態終了時点)

$$(64) \left[\begin{array}{l} -en_{+open} \\ \text{ARGSTR} = [\text{① Adj}_{+OPEN}] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{TS} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL: } s = f < r < \infty \\ \text{CONST: CAUSE (③, [BECOME (②, ER (①))])} \end{array} \right] \\ \text{NTS} = \left[\begin{array}{l} \text{TELIC: BE (②, ①)} \\ \text{TRIGGER: ACT ON (③, ②)} \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

$$(65) \left[\begin{array}{l} widen_{tr.} \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{TS} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL: } s = f < r < \infty \\ \text{CONST: CAUSE (③, [BECOME (②, WIDER)])} \end{array} \right] \\ \text{NTS} = \left[\begin{array}{l} \text{TELIC: BE (③, WIDE)} \\ \text{TRIGGER: ACT ON (③, ②)} \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

$$(66) \left[\begin{array}{l} widen_{intr.} \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{TS} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL: } s = f < r < \infty \\ \text{CONST: BECOME (②, WIDER)} \end{array} \right] \\ \text{NTS} = \left[\begin{array}{l} \text{TELIC: BE (③, WIDE)} \\ \text{TRIGGER: } \phi \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

⁶TS は命題の意味を構成する部門 (Truth Conditional Section), NTS は非命題の意味を構成する部門 (Non-truth-conditional Section) を表す。

- (67)
$$\left[\begin{array}{l} \text{-en-open} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{① Adj.}_{-OPEN} \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{TS} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL: } s = f < r < \infty \\ \text{CONST: CAUSE (③, [BECOME (②, ①)])} \end{array} \right] \\ \text{NTS} = \left[\begin{array}{l} \text{TELIC: BE (②, ①}_{Com.EP}) \\ \text{TRIGGER: ACT ON (③, ②)} \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$
- (68)
$$\left[\begin{array}{l} \text{quieten}_{tr.} \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{TS} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL: } s = f < r < \infty \\ \text{CONST: CAUSE (③, [BECOME (②, QUIET)])} \end{array} \right] \\ \text{NTS} = \left[\begin{array}{l} \text{TELIC: BE (②, QUIET}_{Com.EP}) \\ \text{TRIGGER: ACT ON (③, ②)} \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$
- (69)
$$\left[\begin{array}{l} \text{quieten}_{intr.} \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{TS} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL: } s = f < r < \infty \\ \text{CONST: BECOME (②, QUIET)} \end{array} \right] \\ \text{NTS} = \left[\begin{array}{l} \text{TELIC: BE (②, QUIET}_{Com.EP}) \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

10 まとめ

参考文献

- Abusch, Dorit. (1986). *Verbs of Change, Causation, and Time*. Center for the Study of Language and Information, Stanford University.
- Arai, Fumihito. & Hidaka, Toshio. (2016). A Formal Analysis of Japanese V-yuku and its Grammaticalization. *Japanese/Korean Linguistics*, **23**.
- Bauer, Laurie. (1983). *English Word-formation*. Cambridge University Press.
- Beavers, John. (2013). Aspectual Classes and Scales of Change. *Linguistics*, **51** (4), 681–706.
- Dowty, David R. (1979). *Word Meaning and Montague Grammar: The Semantics of Verbs and Times in Generative Semantics and in Montague's PTO*. Reidel.
- Hay, Jennifer., Kennedy, Christopher., & Levin, Beth. (1999). Scalar Structure Underlies Telicity in Degree Achievements. In *Proceedings of SALT*, Vol. 9, pp. 127–144.
- Igarashi, Yoshiyuki. & Gunji, Takao. (1998). The Temporal System in Japanese. In Gunji, Takao. & Hashida, K.. (Eds.), *Topics in Constraint-based Grammar of Japanese*, pp. 81–97. Kluwer.
- Katamba, Francis. (1993). *Morphology*. Macmillan Press.
- Kearns, Kate. (2007). Telic Senses of Deadjectival Verbs. *Lingua*, **117** (1), 26–66.
- Kennedy, Christopher. & Levin, Beth. (2008). Measure of Change: The Adjectival Core of Degree Achievements. In McNally, Louise. & Kennedy, Chris. (Eds.), *Adjectives and Adverbs: Syntax, Semantics and Discourse*, pp. 156–182. Oxford University Press.
- Levin, Beth. & Rappaport Hovav, M. (1995). *Unaccusativity: At the Syntax - Lexical Semantics interface*, Vol. 26. The MIT Press.
- Lieber, Rochelle. (1998). The Suffix -ize in English: Implications for Morphology. In Lapointe, S. G., Brentari, D. K., & Farrell, P. M. (Eds.), *Implications for Morphology and its Relation to Phonology and Syntax*, p. 1233. CSLI Publications.
- Lieber, Rochelle. (2004). *Morphology and lexical Semantics*. Cambridge University Press.
- Plag, Ingo. (1999). *Morphological Productivity: Structural Constraints in English Derivation*. Walter de Gruyter.
- Pustejovsky, James. (1995). *The Generative Lexicon*. MIT Press.
- 影山太郎 (1996). 『動詞意味論: 言語と認知の接点』, 5巻. くろしお出版.
- 影山太郎 (2007). 「接尾辞 「-化」, -ize, -ify の属性叙述機能」. 『人文論究』, **57** (2), 19–36.
- 郡司隆男 (2004). 「日本語のアスペクトと反実仮想」. *TALKS: Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin*, **7**, 21–34.

- 杉岡洋子 (2009). 「形容詞から作られた動詞」. 影山太郎 (編), 『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』. 大修館書店.
- 松崎徹 (2011). 「脱形容詞動詞の-en 派生について: 音韻条件の有効性とその限界」. 『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』, **6**, 79-87.
- 山根一文 (1983). 「語形成に関する一考察 (2): 動詞化接尾辞について」. 『福岡女子短大紀要』, **25**, 13-23.

辞書・コーパス

- British National Corpus. < <http://www.natcorp.ox.ac.uk/>>
- Cambridge Advanced Learner's Dictionary*. Cambridge University Press.
- Collins Cobuild English Dictionary for Advanced learners (Third Edition)*. (2001) Harper Collins Publishers.
- Oxford Learner's Wordfinder Dictionary*. (1997) Oxford University Press.
- The Random House College Dictionary (Third Edition)*. (2001) Random House, INC.
- 『ジーニアス英和辞典 (第四版)』 (2006) 大修館書店
- 『ジーニアス英和大辞典』 (2001) 大修館書店
- 『ロングマン現代英英辞典 (四訂増補版)』 (2003) 桐原書店